得度式を了えて

梅田　尚平

佛教大学文学部佛教学科卒業
総本山知恩院に於て伝宗・伝戒道場成満。
昭和38年熊本県生まれ。

四月十八日夕刻、私は田中智誠師と共に黒田理事長のお見送りをうけ、成田空港から一路タイのバンコクへと、テーラヴァーダ仏教の僧修行に向けて飛びたった。

現地時間の午後九時五十五分、ドンムアン空港に到着、私はタラップを降りながらこの国の熱気とバンコクの匂いに一種の興奮を覚えた。夜分にもかかわらず、世界仏教徒連盟事務次長の小谷亀太郎氏にお出迎えをいただいた。ワットパクナムについた時はすでに十二時をまわり、しんと静まりかえっていた。プラスーム師に室へ家内され、小谷氏にお礼と挨拶をして就寝。翌朝午前五時、隣の庫裡に起居する沙弥、優婆夷達の水浴びの音で目が覚める。あたりはまだ暗く、しばらくして太陽が赤い屋根を写し出し、異国に来た実感を味わった。

ここでワットパクナムの概要にふれてみよう。この寺院には現在、僧侶及び信者達を含めておよそ百名近い人々が生活を共にしている。この寺の前住職で中興の祖と呼ばれているチャオクン・モンコン・テープムニー師に対する地元の人達及び信者の信奉は、師の死後二十七年を経過した今日においても絶大なものがある。この寺院は観光寺院の一つとしてではなく、瞑想修行の寺としてタイ人をはじめとして、日本の禅宗系の僧侶にも有名である。この瞑想法はSamatha（止）

息とVippasanā（観）法を含み、心・身の整調によって始められるもので、即ち、心を静めて一つの対象に集中させることによって、正しい智慧が起こりあらゆるものの真理（対象）を観察することにある。テーラヴァーダ仏教においては修行上での基本的な概念として、いわゆる戒・定・慧の三学が密接な関係を保ち、またその中での禅定はテーラヴァーダ仏教の瞑想の中核となる修行法である。現在この寺では夕方、六時半から瞑想堂において副住職のチャオクン・ブラ・バーワナ・ローソン・テーラ・ヴィラ・カメタモー（河北国雄師）の指導のもと、比丘、沙弥、優婆夷及び一般在家等、約二百名近い人が集まりこの瞑想法を実修している。また土曜、日曜ともなると寄進者が僧への供養に大勢みえられ斎堂を埋めつくす。彼らは僧や寺院に対しての財施を行なうとともに自らの徳を積むことによって来世の安住を願い、僧はパーリ語による経典読誦によって彼らの功徳を普く一切に回向するのである。

さて午前六時より第一回目の食事である。僧は午前中に二回食事をとり、その後翌朝まで固形物は一切許されていない。本来テーラヴァーダ仏教においては僧としての基本的な生活の上で守らねばならない四つの

堂内で点燭

訓戒があり、その第一番に托鉢に行くことと規定されている。この寺では午前五時半ごろから托鉢に出る僧が何名かおられるが、ほとんどの僧は、前住職が生前、比丘達が托鉢にまわる時間を節約して勉強ができるようにと、当時三十六万バーツをかけて台所と食堂を建てられ、その役割を優婆夷達が分担しそこで作られた食事が信者からの供養として賄われている。私はここにきて初めて出家と彼らをサポートする在家との関係を理解することができた。到着後しばらくして副住職の河北先生から五月一日の午後四時から私たちの得度式を行なうとの連絡をいただいた。前々日午後の瞑想が終ってから田中師と二人で別の庫裡に住む、ブラクルー・ピッチャイ師について式次第の発音の特訓を受ける。幸い次の日に別の得度式が行なわれたので私達も参列させていただき、その一部始終を見ることができた。この得度式の後に僧に対するタンブンが行なわれ、九名の僧が守護の呪文を読誦し、すべてのものを聖化する厄よけの霊系《サーイシン》によってブン転送の儀式《クルワット・ナーム》が行なわれていた。実際のところ得度式までは、着いてから約一ヵ月位は余裕があるだろうと勝手に決めこんでいただけに決定から八日あまりしかないとなると自然に心は焦ってくる。にもかかわらず一向にパーリ語が頭に入らない。

五月一日、得度式当日、そのころになると当初に比べ体もすっかりこちらの気候にも慣れ、四月の真夏時を少し経験した後だけに日差しも和らぎ過ごし易くなってきた。朝食後庫裡のベランダから河北先生が〝今日です〟と指で四時を表わし、慈愛のこもった眼差しを投げかけ大きな声で笑って下さった。私達の気持ちを察してか緊張していた心がしだいに溶けていくのがわかり、無畏の施しを受けたようで有難く思った。

さて今回の私どもの得度式にあたってヨームを引き受けて下さった小谷氏御夫妻がみえられ、続いて我々の供養者として名のりを上げて下さったアカポン氏御一家も到着された。また友人代表としては、ワット・リアップで日本人納骨堂主事の木村聡元師、それに写

得度式後、応量器をいただく

真撮影で協力していただいた中尾茂人氏にも参列してもらいワットパクナムの優婆夷の方々に大勢参列者全員で布薩堂の周囲を三回まわり得度式が始まった。今回私たちが得度式を受けるにあたり、戒師である住職のプラ・タンマ・ティララート・マハームニー師のタイ語での訓戒を河北先生が日本語に訳して下さるということで、私たちにこの式の意味を一層理解させる上での御配慮として有難くうけとらせていただいた。式も後半に入り不安ながらも十戒文のところでは羯磨師のブラクルー・ウバタン師のサポートのおかげで、二五二八年五月一日午後五時十分、ワット・パクナムにおいて、僧名ティーパラタノーとなり佛弟子として迎えていただき無事に了えることができた。途中、問障碍法のところで雷鳴轟く中、俄雨が二十分程はげしく降った。が、雨降って地固まるの諺のごとく私どもの前途を祝福するかのような一瞬の通り雨であった。あがると同時に夕焼けが西の空を赤く染める中を皆で記念撮影をして長い一日を了えた。

五月三日は布薩式 uposatha が行なわれた。前日が剃髪日と定められており、比丘達はお互いに頭を剃りあい浄域をもつ布薩堂において僧伽に属する出家者全員によって行なわれる。特に満月と新月の二日間は比丘にとって重要な「波羅堤木叉 pātimokkha」が読誦される。副住職の河北先生が唱文した後、パーティモッカ読誦僧が驚異的な速さで、二百二十七ヶ条の戒律を読みあげていく。この布薩式によって過去に犯した行為を反省し告白懺悔するのである。

私は昭和五十五年六月に日本において得度式を受けたのだが、タイでの今回の得度式は、僧俗の区分が不明確になっている日本仏教とは質的に異なった感じを受けました。この得度式を受けるということは、いわゆる出家することを前提としており、世俗を離れたところの戒律によって生きるということを自覚せずにはいられない大きな意味をもつものであると感じた。また僧伽と一般社会とはお互い合入れない隔絶した秩序があるが、還俗の自由が認められているように僧伽への流入は頻繁に行なわれている。我々の僧修行もそれで形だけは整った。しかし、まだスタートしたばかりである。これからは如法に具足戒を遵守し、瞑想（カマタン）による禅定を少しずつ体得していきたいと考えている。またこの一年間の修行期間中にできるだけタイ語を習得し、お互いの国の文化交流を図りたいし、また戒律仏教のあり方や、大乗仏教との比較も含めて相互理解を深められるように努力したいと考えております。